五月の幼兒童謠

葛原しげる

○

五月は、春の眞中、朝から晩まで何しても長閑で、幼兒の手足も心も伸び伸びと、はつらつたる季節です。家の中の眠りも快よく、戸外の遊びも樂しく、幼兒には、嬉しいばかりの時です。物みなが、笑顔で、幼兒に働きかけてくれます。風は、そよ〳〵と、土筆は地面からとぼけて長い頭を突出して、草花は次々に咲いて、開いて、蜜蜂が、羽音をたてゝ面白げに花から花へ遊び廻つていろ〳〵の小鳥も樂しげで、太陽さへも何だか、おだやかに霞んで强烈でなく、高い空では雲雀が歌つてゐるし、野原一面に陽炎も踊つてゐて、草も、木も、すつ〳〵と伸びてゐるのです。ですから、家の中になんか居ないで、出てごらんよ、「みんな出て御らんよ」なのです。

——春の風そよ〳〵——

林柳波氏歌
平岡均之氏曲

春の風そよ〳〵　土筆が芽出した
たんぽぽすみれ　花が咲いた開いた
春の風そよ〳〵　蜜蜂ブン〳〵〳〵
小鳥はピィ〳〵　花に來て遊ぶよ
春の風そよ〳〵　お日樣にこ〳〵
子供もにこ〳〵　葉も木も伸びるよ
春の風そよ〳〵　雲雀はうたひ
陽炎は踊るよ　みんな出てごらんよ

（童謠名曲全集一）

これは、各節を春の風そよそよで起して、氣易さを與へ

てあります。その上、蜜蜂ブンブン、小鳥はピィ／＼、お日樣にこにこ、子供もにこにこ、と、擬聲擬態を巧みに織りまぜて、誠に氣樂に、この長さも短かく感ぜしめてあります。次のも、よく似たものでありまして、陽炎は丘に見出し、霞は遠山に見分けてあります。櫻は五月でもありませんが、春の野の長閑さです。

——野　遊　び——

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

ヒラヒラ　ヒラヒラ　蝶々がまうて
チピチピ　チピチピ　小鳥が啼けば
菫や　たんぽぽ　きれいに咲くよ
野原で遊べば
おもしろ　たのし
近くの丘には　陽炎もえて
遠くの山には　かすみがかかり
山にも　丘にも　櫻がさくよ
野原の遊びは
おもしろ　たのし

（「大正幼年唱歌」第五集）

○

五月は早々、五日に端午の節句があります。桃の節句と共に、日本の子供うれしき春の二つの子供祭でもあります。中でも五月のは、風の寒い三月と違つて、戸外の溫かさ、幼兒も手足を伸べて遊ぶ心を具象させてでもありませんが、日本にだけ威張れる鯉幟、思へばかなり特殊の風習、男兒のよろこびでもあります。殊にそれが、男兒のある家の證據にさへなつて誇らしい事です。小學校の國語讀本にも名文があります。

ユフベノ雨ガハレテ、青葉ノ上ニ日ガ氣持ヨク照ツテキマス。サキノ先ノ矢車ガガラガラト鳴ルト、鯉ガ大キナ口デ思フゾンブン風ヲノンデ、家ノムネヨリモ高ク尾ヲ上ゲマス。ソノ尾ヲ下シテ來テ、サキニツケルカト思フト、マタ腹ヲフクラマセテ、ヲドリ上リマス。ソノ度ニ鯉ノカゲガ、地ノ上ヲ泳ギマス。

如何にも勇ましいコドモのシンボルとも見るべき鯉のぼりの活々した描寫です。そこで童謠としても、幾匹もの鯉と鯉とが競爭で泳いでゐることゝ、之れに敗けないで、矢車も快よく廻つてゐる元氣よさとを、うたつてあります。そして、又、

日本晴の青空で
といふ誇らしさを、忘れませんでした。日本晴です、澄んだ青空です。日本晴の青空を泳ぐのです。

——鯉　の　ぼ　り——

葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

黑い鯉やら　赤い鯉

大きな鯉が　いくひきも
ならんで竿に　つかまつて
まけずに泳ぐ元氣よさ
　日本晴の青空で
布の鯉やら　紙の鯉
大きな鯉が　いくひきも
泳いでをれば　矢車も
まけずに廻る面白さ
　日本晴の青空で

（「大正幼年唱歌」第九集）

○

五月の花の中に、藤があります。特に幼兒向こいふのではありませんが、「下るほど名は上りけり藤の花」なぞゝ道歌めいた事はさておきまして、池水にうつる藤の花の美しさよりも、面白さは、幼兒を引きつけるのに充分です。そして、映つてゐる花の中を、少しの障りもなく、鯉が泳ぎぬけるこ見える所、不思議でもありますが、それにもまして、

水の底にも　きれいな色よ

です。

しかし、これを

水の底にもきれいな花よ

こしては如何でせう。さうするには、前句も

藤は紫
きれいな花よ

こもしたくなるのですが、幼兒には「色」よりも、「花」そのものゝ方が、ふさはしいのではないかこ、今、しきりに、氣にしてをります。

――藤の花――

葛原しげる歌
梁田貞氏曲

お池の上の　棚にさいた
藤は紫
きれいな色よ
きれいな房が　水までたれて
水の底にも　きれいな色よ

（「大正幼年唱歌」第二集）

○

この季節のものに、竹の子があります。（筍の事ですが、文字は多くても、竹の子供こかきたいしろ物ですね）それは、一夜の中に、ぐんぐん伸びる勢のよいここ。その高さが、自分こ同じ位になる事を待つてゐる幼な心、やがて、次の朝は自分より高くなり、その次の朝は見上げる樣に高く高く伸びてしまふ事を知らないのもうべ。まここに、快よい幼な心ではありませんか。

――伸びた竹の子――

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

のびたよ／＼　竹の子／＼

きのふ頭を出してた竹の子
のびたよ〳〵
きら〳〵きら〳〵　きれいな〳〵
つゆが　あさひに　光るよ　葉の先
きら〳〵きら〳〵
のびろよ〳〵　竹の子〳〵
はやく　私と　おんなじ　たけまで
のびろよ〳〵

（「昭和幼年唱歌」第四集）

○

竹の子、木の子、次には、草の子がありたいものですね。ありますね。「つくしが草の子杉菜の子」とあります。私の郷里では、土筆のことを、法師とよんで、

ほうし　だれの子
すきなの　よめの子

と繰返し〳〵歌つて、土筆を探すことになつてゐますが、「杉菜の嫁の子」とは、つまり「杉菜の子」にあたりますね。それとも「杉菜の嫁」といふ意味の「嫁つ子」でせうか、それにしては、土筆こそ坊主頭の男性で、杉菜の方が、やさしく、なよ〳〵とした女性の感じですね。

ところで、いかに、春の日永とは申せ今、こゝでそんな探究は止しまして……やはり、「つくしは草の子、杉菜の子」の方がよろしく、「草から生れた筆」がふさはしいのです。しかも、土筆の幼兒も、袴をはいた一年生、これから、おけいこの一番はじめで、アイウエオを習ふのださうです。といつても、實は、小學校の一年では、五十音としては習ひはじめないのですから、この「アイウエオ」は、初歩の文字のことを意味すると見るべきです。袴も、今は、あまり、つけない。洋服姿になつてしまひつゝあるのですが。（その探究も今は禁物）。輕快な詞と、その思想の流れの面白さに、反復二三回、幼兒と共に、うれしくなつてしまひます。

――草　の　子――

濱田廣介氏歌
宮原禎介氏曲

つくしは　草の子　杉菜の子
草から　生れて　筆一つ
おこしに　はかまも　つけました
これから　手ならひ　アイウエオ

（童、唱名曲全集――）

○

春酣になつて來ますと、都會の幼兒をこそ、土に親しませたいものです。それには、まづ、砂場遊びの他に、花壇を與へたいと思ひます。どうしても不可能ならば、箱庭一つ、植木鉢一つ。

その花は、幼兒自ら土をやわらげ、幼兒自ら種子を植

ゐ、幼兒自ら水をやつて、自分がそだてゝ咲かせたいものでありたいですね。凡そ、花を愛するほゞ自然の愛情流露はありません。花を愛しない人種は地球上にないのですもの。それゆゑに、花を生けて樂しむ人間――日本人は、どうしても、好戰國民ではないのです。もし、さう謂はれゝば、謂はれるだけ、幼時から、花を愛させたいものですね。

――お庭の草花――

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

私の庭の草花が
芽を出し葉を出し
きのふから、すつかり大きくなりました
毎朝　毎晩下駄はいて
私が　水を　やりますと
すぐに吸ひます　よろこんで
私の庭の草花が
白も　黄色も　紫も
みんな　きれいに　咲きました
毎朝　毎晩　下駄はいて
おいしい水を　やりますと
花は　ゐがほで　ありがたう

（「大正幼年唱歌」第一集）

花が、笑顔で、お禮をいふところ、かなり意味深長でありますがその説明をくどくしたり、まねを幼兒に强ひてはなりません。これは、第一節の、

「すぐにすひます、よろこんで」の「よろこんで」が、大切であるのと同じやうに大切なのですが、唯、この通り、この詞を覺えて、歌つてさへゐて下されば、充分なのです。さて、

――私の花壇――

葛原しげる作歌
イギリス名曲

きれいに　さいたよ
私の花壇
むらさき
あか
しろ
ももいろ
きいろ
あれ〳〵
ひら〳〵
まふよ　蝶も
きれいな　きれいな
私の花壇

（「大正幼年唱歌」第十一集）

――小さな花作――

葛原しげる作歌
ドイツ名曲

あれ〳〵　うれし

お花が　さいた
みな　よく　さいた
私の花が
私が　うゑて
さかせた花よ
お水を　やつて
そだてた花よ
おいでよ　蝶々
ひら〳〵　とんで
お花に　とまれ
しづかに　とまれ

（「大正幼年唱歌」第十二集）

の二篇は、蝶々を呼びました。花壇につきものゝ蝶々です。美しい花、美しい花壇ですがたゞ美しく咲いてゐるだけでは、實は、幼兒には物足らないのです。そこで、花に風が吹いてくれて、花が動いて、花が踊つてゐるやうにあるか、笑つてゐる樣に見えてくれなくてはなりません。と同じ願で、花の散るやうにも見える蝶々を、迎へたのです。

○

春日遲々まことに、かつたるい午さがり、春の牧場の主は、牛の小父さん、菫さま、蝶まふ溫かさに、ごこまでも、心のぢかな小父さん牛はうと〳〵うと〳〵。

牛が寢入つて目のさめぬだけ、菫の花の少しの搖れが、目につき、蝶の翅のひら〳〵するのが目立ちます。そんな六かしさよりも。これを、舞踊化したら何んなお子さんが、牛になりたがり、蝶になりたがることでせう。

女のお子さんは、きつと菫の花になりたいことでせうし、男のお子さんでなくては、牛にはなりたくないでせう。しかし、もし、お子さんの中に、

「センセ、ワタクチ、ウチニナリマチユ」といふ聲が出ましたら、そして、もし

「ボク、チョウニナリタイナ」

といふ聲が聞えましたら、その平素に、多少の注意を要しませうね。

――牛のひるね――

清水かつら氏歌
草川信氏曲

一、牛の小父さん　ひるねです
　牧場で　うと〳〵　ねてゐます
二、すみれが　お鼻を　こすつても
　うと〳〵　ねてます　日がながい
三、「それでは　わたしが　おこしましよ」
　お袖を　ふり〳〵　蝶が來る
四、蝶々は　お袖で　つのはたく
　それでも　うと〳〵　日はうらら

五、うらら　うららの　日をあびて
　牛の小父さん　ねてゐます

（童謡唱歌名曲全集—一）

○

春の眞中の野中の歌は、雲雀の專賣特許です。そして、幼兒にとつての不思議は、その姿が見えないで、聲ばかり聞えて來ることです。しかも其の聲の滑らかで、澄んでゐて、また圓やかで、スウキートで、えもいへぬ美しさは、それこそ、雲雀の專賣特許ともいひませうか。空の聲も、地上の聲も、ともにその所在の明かでないことが、幼兒にでなくても、不思議でもありますね。

——ひばり——　文部省

ぴい〳〵〳〵と　さへづる雲雀
さへづりながら　ごこまで上る
高い〳〵雲の上か
こえは　きこえて　見えない雲雀
ぴい〳〵〳〵と　さへづる雲雀
さへづりやんで　ごこらへおちた
青い〳〵麥の中か
すがた　かくれて　見えない雲雀

——雲雀——　三木露風氏歌　山田耕作氏作曲

ちいちく　ちいちく
ぴいぐろ　ぴいぐろ
　ちいちく〳〵ちいち
ひばりは　なきだす　麥畑
ちいちく　ちいちく
ぴいぐろ　ぴいぐろ
　ちいちく〳〵ちいち
たかく　のぼつた青天井
ちいちく　ちいちく
ぴいぐろ　ぴいぐろ
　ちいちく〳〵ちいち
はたけに下りて　日がくれる

（童謡名曲全集、一）

——雲雀——　葛原しげる歌　梁田貞氏曲

日の出ぬうちに　青空高く
囀る雲雀　野の雲雀
夕日は西に　かくれた後も
囀る雲雀　野の雲雀
　ピューグル　チューグル〳〵〳〵
　ピューグル　チューグル〳〵〳〵
姿も見せず　なく雲雀

（大正幼年唱歌、第九集）

三篇ともに同じ内容ですが、雲雀の啼聲を三樣にきゝわけてある事に注意してみたいと思ひます。文部省のは、

ぴぃ〳〵〳〵

の一本槍で、三木氏のは、

ちいちく、ぴいぐる

で、私のは

ぴゆーぐる、ちゆーぐる

です。その何れが、本物に近いでせう。私は又、「ぐる」でなく「くる」とも聞きます。遠く高いのは、「ぴーくる」と弱く聞え、近く低いのは、強く「ぴーぐる」と聞えます。「ぴいぴい」と鳴くのは、カナリヤではありませんか。この擬聲は、全く、文字では書きにくいのですが、非常に興味のあることで、これだけの爲に、一研究してみたいものです。幼兒にも、きゝわけて、そのまねをさせて見る事にも、少らぬ意義があります。

次の一篇は、上る雲雀、上つてしまつて見えなくなる雲雀、そして、下りて來る雲雀を、巧みに歌ひ分けてあります。しかも其れは、三羽の別々の雲雀とも見えますが、また、雲雀の特性の一つとして、巣の所在は、人間のいたづらつ子に見つけられない樣にとの細心の注意から、巣のない方へ下りて、目をごまかすといふ事ですから、麥田の上から、れんげの畑へと下りて來るのでせうか。

——ひばり——

岩橋喜宮一氏歌
佐々木すぐる氏曲

あれ〳〵雲雀が　啼き〳〵上る
青い麥田の眞上の空に
あれ〳〵雲雀が　啼き〳〵消える
廣いお空の霞の中に
あれ〳〵雲雀が　啼き〳〵下りる
赤い　れんげの咲いてる畑に

（童謡唱歌名曲全集、一）

○

春も酣になりますと、燕が戻つて來ます。あの紫紺色にも光つて艶のよいスマートな燕、かなり人なつかしげな眼ざしをして、軒にとまつたりして可愛いゝ小鳥、その特徴を、少し説明にすぎましたが、二昔も昔、歌つて見ました。急行列車や飛行機を出したのは、今更、不調和にも感じますが、速いことをいひたく、幼兒に注意させたいのです。

——燕——

葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

電信線に三四羽の
燕が　とまつて　チピ〳〵〳〵
何の話か　チピ〳〵〳〵
見てゐる中に　とび出した
急行列車か　飛行機か

古巣のおうちへ　一目散
燕の體は　小さいが
空を　とぶには第一等
翅は黑くて　黑光り
お腹は白くて　雪のやう
尻尾は二つにわれてゐて
燕は　ほんとに　速い鳥

（大正幼年唱歌、第五集）

次のは、人になつきよりはしなくても、その心は充分に有りとみえる燕ですから、かうした口も利きたいのでせう。全く擬人化してあるのですが、どこか、そこいらに居さうな子供にたとへてありますので、幼兒も、自分の事には、すぐ考へないでも、お友達の中の誰かさんみたいな、とぐらゐには思へて、につこりさせられること〻思ひます。

――燕のあいさつ――

佐藤八郎氏歌
弘田龍太郎氏曲

一、昨日の夕方　つきました
　ごきげんよろしう　存じます
二、すまひはやつぱり　お隣の
　うまやの軒に　きめました
三、子供がよつたり　ふえました
　みんな　おいたで　困ります
四、伯父さん燕も　けさ早く
　みそやの横に　こしました
五、ばあやは一足　おくれます
　それでも　明日は　まゐりませう
六、かたづきましたら　お遊びに
　ごきげんよろしう　存じます

（童、唱、名曲全集、一）

○

まだ冷たい水の中には、早くも蛙が卵を産んで、それが、お玉じやくしになつて、子供の好奇心をそゝります。殊に何百何千何萬の同じ形の同じ色の、やゝ無格好なのが行列をしたり、亂れ泳いだり、時々群をはなれた氣まぐれなのがゐたりして、中々面白いものです。殊に、面白いのは、數日のうちに、脚が出たり、手が出たりして、尾が無くなつて、蛙になる其の變化は、水の中から陸へ上つて生活出來るといふ非常な進化の現はれで、これは、ダーウヰンではありませんが、「自然」の力、自然の變化――進展に、幼兒の注意、少くとも興味は導いておきたいところです。出來る事なら、大きいガラスの金魚鉢の類の中にでも飼つておいて、よく觀察させたいものです。

――お玉じやくし――

吉丸一昌氏作歌
梁田貞氏作曲

お玉じやくしは　まつくろで

あたまが圓く　尾が長く
手足はなくても　ちよろ〳〵こ
池の中をば　はねまはる
　お玉じやくしは　かはいゝな
お玉じやくしの尾がこれて
蛙となつて　目が出來て
手足が出來ては　ぴよん〳〵こ
草の中をば　こびまはる
　蛙の子供は　かはいゝな

（童、唱、名曲集一一）
葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

――お玉じやくし――

お玉じやくしが大きくなつて
短い脚が　だん〳〵生えた
　足が生えても　歩かずに
　水の中をば　泳いでまはる
　　早く尻尾を無くして歩け
　　水の中から　こんで出よ

（大正幼年唱歌、第五集）

剣刀いよよ研くべし古ゆ
　清けく負ひて來にしその名ぞ

（大伴家持）

いざ子ども戯わざな爲そ天地の
　固めし國ぞやまと島根は

（藤原仲麿）